

山梨大病院

「院内助産室」拡充へ

新病棟に専用床用意

山梨大付属病院(島田真路院長)は、助産師が主体となってお産や産後ケアに当たる「院内助産室」の拡充に乗り出す。今月から着工する新病棟に専用病床や個室を確保。助産師を育成し、お産の取り扱いを将来的には年間300件に増やすことを目標に掲げている。新病棟が完成する2015年度以降、新体制で受け入れを目指す。

〈桑原久美子〉

同病院は09年に院内助産室を開設。本人が希望し産科医が出産リスクが低いと判断した妊婦を対象に、助産師が健診の一部を担当する「助産師外来」と併せ、出産、産前、産後のケアに当たって

いる。

現在は院内助産専用ベッドはないが、新病棟には院内助産専用のベッドを5床用意。陣痛から出産まで対応できる約30平方メートルの部屋を二つ新設する。助産師の確保や育成を

進め、将来的には現在の25人から10人ほど増員する。他病院の助産師教育や他病院への助産師派遣の体制整備も視野に入れる。

産婦人科の平田修司教授によると、県内は産科医不足でお産ができる病院が少なく、開業医の高齢化で、さらに減ることも予想されるため、受け皿確保が課題。同病院はリスクが大きい出産の妊婦を中心に年間約500件受け入れているが、現状では体制に余裕がなく断るケースもあ

る。12年度に院内助産で出産したのは31人で、体制拡充によって徐々に増やし、将来的には年間300件を目指す。産科医は、リスクが大きい出産など高度医療に専念する。

院内助産は健診時から出産

まで顔なじみの助産師が担当するため、妊婦のニーズにきめ細かく応えられ、満足度の高いお産が実現できる利点もあるという。

県医務課によると、県内の院内助産は同病院のほか県立中央病院で実施。助産師外来

は両病院を含む計7病院で行っている。同課は「院内助産を拡大する動きは全国的に広がっている。リスクが大きい出産は産科医、医療行為の必要のない通常のお産は助産師と分業が進むのではないかと考えている。」